OSAKA MUSEUM OF HISTORY
大阪歴友
Vol.14
2009.JULY
大阪歴史博物館　友の会だより　No.16

オノコロ島を探す旅（その1）に参加して

伊藤　陽子

慶野松原にて（スケッチ：市ノ瀬けい子さん）

三ヶ月ほど前、たまたま「古事記」「日本書紀」の日本神話を読んだばかりの頃、友の会より国生みの地、オノコロ島を探す旅の案内が届きました。淡路島へはいまだ一度も行ったことがなかったので、早速申し込みをしました。7月11日(土)朝8時出発とのこと。空は梅雨時のどんよりした中を、心配しつつ出かけました。二台のバスが待機していて、聞くところによると83名の参加の方々だということでした。まずは兵庫の田崎真珠に立ち寄りました。1階の展示室で何億円もする立派な冠や豪華な装飾品を見た後、2階で真珠の見分け方、飾り方を学びました。

見学後、いよいよ淡路島に出発です。1時間余りで島の西南寄りの慶野松原海水浴場近くの国民宿舎に着き、昼食です。特産品の玉葱が味噌汁のなかに少し入っていました。友達四人でテーブルを囲み楽しく時を過ごし、その後海岸を散歩しました。

午後1時、出発です。待ちに待ったおのころ島神社です。西淡三原の小高い丘に赤い大きな鳥居が見えてきました。ここは「オノコロ島」の候補地のひとつです。イザナギ・イザナミの二神が天と地の間の天浮橋に立ち、矛で潮をかき混ぜ、引き上げた矛先からしたたる潮水で島ができました。これが「オノコロ島」だそうです。二神はそこに降り立つと夫婦の契りを結んで淡路島をはじめ七つの島を産みました（大八島国）。さらに多くの神が誕生し、火の神が産まれた後、イザナミは亡くなってしまいます。その後、イザナギは禊をして黄泉の国のけがれを祓った時にアマテラス・ツクヨミ・スサノヲの三神が産まれました。夢か現実かわからないような話ですが、物語のなかに登場する島が目の前にある、何とも不思議な気持ちになりました。この神社の周りには神話に出てくる塩砂所、天浮橋、セキレイ石、古代の神木があり、社殿も屋根は葦で葺いてあり千木も8本。伊勢神宮と同じく20年に一回造営があるそうです。

次はいったん淡路人形浄瑠璃資料館を訪ねました。室町時代からの操り人形の歴史を学び、展示室で衣装・大道具・小道具・カツラ等を見学しました。

再び、オノコロ島ゆかりの地へ。伊弉諾神宮は淡路国一宮で、イザナギが先の三神に高天原、夜の国、海原の統治を任せてお隠れになった幽宮の故地とされるところです。現在の本殿はイザナギの墳墓の上に立っているそうで、近くには二本の楠木が長い年月の間に一株に成長した神木が祀られていました。そして最後は淡路島の北端岩屋港の近くにあり、やはりオノコロ島の候補地とされる絵島へ。高さ20mほどの小島で岩肌の縞模様がとても美しかったため、しばし岩の上を歩きまわりました。

こうして第1回オノコロ島を探す旅は無事終了し、帰路につきました。第2回も楽しみにしています。

伊弉諾神宮本殿前にて（撮影：今井捷子さん）

西国街道を歩く　第7回　高槻途中下車編

井上　智勝

平成21年3月28日（土）、早くも7回目を数える人気の見学会"西国街道を歩く"は、街道をちょっと離れて、高槻城下に寄り道しました。高槻市教育委員会認定ボランティア"文化財スタッフの会"の皆さんのガイドで、西国街道から城下に続く八丁松原を南へ、京口跡の道標からいよいよ城下に入ります。万延二年（1861）に建てられたこの道標、道路拡幅の際に向きが変えられてしまい、今これに従って進むと道を誤ってしまうとのこと。城下町の風情を色濃く残す寺町を経て、高槻城三の丸跡に建つ「しろあと歴史館」へ。道中、高槻城内高麗門が移築された本光寺、道の真ん中に頭を出す思案石が印象的でした。しろあと歴史館では、常設展示と春期特別展「おおさかのおもちゃ」を見学しました。続いて、野見神社へ。この境内には永井氏高槻藩初代藩主直清を祀る摂社永井神社もあります。藤井竹外旧居跡、高山右近記念聖堂を見つつ、JR高槻駅へ到着です。

それぞれに昼食を採り、午後1時に再集合。午後は、古墳や埴輪工場跡をめぐる考古ツアーです。考古担当の文珠学芸員も加わり、阿武山へ移動。途次、もう満開の桜が春本番を告げていました。続いてハニワ工場公園へ。植木をうまく利用して登り窯の位置を示す手法には、感心しました。ただ、実はこの手法、「難波大蔵」を守る塀の柱の位置を示すために当館でも使われているんです。本来はこの後、全員で大織冠神社へ移動するはずでしたが、時間的な制約からひとまず解散、希望者だけが大織冠神社を目指しました。ベッドタウンとしてのイメージの強い高槻ですが、豊富で奥深い文化資源が盛りだくさんです。ツアーに参加できなかった皆さんも、ぜひ一度足を運ばれてはいかがでしょう。必ず新しい発見があるはずです。末尾ながら、いろいろお世話いただいた「しろあと歴史館」の西本学芸員、ならびに"文化財スタッフの会"の皆さんに厚く御礼申し上げます。

八丁松原にて"文化財スタッフの会"の方の説明を聴く

犬山見学会に参加して

中川　金太郎

5月6日（祝・水）、新型インフルエンザがこんな大騒ぎになるとは思いもよらなくて、尾張犬山城及びその周辺の見学会に参加をさせていただき、まったく楽しい思いをさせていただきました（インフルエンザにより被害を受けられた方々には改めてお見舞いを申しあげます）。

濃尾平野の代田を見渡します頃には春雨とは申せ生憎雨も降ってきまして、困ったことだと思っておりました。しかし、特別天然記念物のヒトツバタゴの群生を見まして雨のことなどすっかり忘れて見入ってしまいました。

尾張路やヒトツバタゴ（なんじゃもんじゃ）に春の雨

初めて見た感動でした。真白な花が樹冠を覆い、雪が積もった様に見事なものでした。国内でも知らない樹や花が多くあり、大変勉強になりました。ありがたいことであると思っています。

また織田信長ゆかりの織田有楽斎の庭園に到着した頃には雨もあがり、五月の新緑が歓迎してくれました。

雨あがる紅葉若葉の有楽苑

数奇を凝らした茶室や庭園の造りには風雅の道を解さぬ私も感動いたしました。

犬山城は初めてでありまして、あの急で薄暗い狭い階段には閉口してしまいました。昔の人はあんな急で暗い階段を駆け降りていたのかと関心してしまいました。名古屋城へは何度か訪れましたが犬山城は初めてであり、天守からの城下の眺めも素晴らしいもので楽しい一日でした。下手な俳句もいくつか捻りながら帰路につき、無事に帰阪することができました。

先生の的確な説明と幹事の方々のご努力に深く感謝いたします。次回も機会があれば参加したいと思っています。ありがとうございました。

特別天然記念物ヒトツバタゴの自生地にて
（撮影：近藤信子さん）

西国街道を歩く　第8回　高槻～上牧

斉藤　晴美

今回、5月31日（日）は高槻市内の西国街道を上牧まで歩きました。多くの道標を見てまわりましたが、あまり馴染みのない地名などが多々ありました。

最初の道標は能因塚です。古曾部の地にあり、地名から古曾部焼を思い浮かべました。今ではそれは焼かれていないようですが…。その道標は「古曾部の入道」と呼ばれた平安時代の歌人能因法師ゆかりのものです。2番目の道標はその能因法師が日々暮らしの水を得ていた「花の井」への道案内のものです。別名を「山下水」と言うそうですが、その周辺に目を向けると、この地域は山で囲まれているのがわかります。豊かな森林に恵まれていると地下水も豊富にあります。「山下水」と呼ばれていたのも納得できます。

町なかに愛宕神社の燈籠がありました。講中によって建立された由。この燈籠は道標の上に屋根がのっているいたってシンプルなデザインではありますが、見たところでは伏拝（ふしおがみ）を兼ねているようです。この伏拝にお参りすれば愛宕神社へお参りしたことになる。この様な伏拝は各地で見受けられます。

次に磐手社（いわてもり）神社お旅所の道標を横目に磐手社神社へと向かいました。この神社の本殿の背後には鬱蒼とした鎮守の森が形成されていて、高槻十景（勝）のひとつに数えられています。「続千載和歌集」に紅葉にちなんだ歌も詠まれています。この自然豊かな境内にかつて大勢の人びとが紅葉狩りに訪れた様子が偲ばれます。

畑山神社境内には「妙法蓮華経」と刻まれた慶長13年（1608）銘の五輪塔がありました。題材は連弁を刻んだ立派な石塔です。ここには7世紀後半、梶原寺が建立されていて、飛鳥・奈良時代の瓦が出土しています。また境内には大きな楠の古木があり、注連縄で飾られ神木として崇められていました。手で触ってみるとザラザラとした感触で、長老をも思わせるような風格が感じられ、長い年月を生きてきたのだなあ～と感じ入りました。

日蓮宗の一乗寺へも立ち寄りました。少し時間があったので境内の奥まで足を延ばしてみると・・・奥まった建物の表玄関に立派な衝立がありました。何やら文字が書かれていたので、中の人に尋ねてみると、何と王義之(中国の著名な書家)の作と言うではありませんか。誰かが中国で拓本をとったものを持ち帰った由。「如是抄」（?）と書かれていて、意味は「全てこの世のものは、目に映るものはしかりと現れたものばかり」。凡人には何だかわかったようなわからないような、ちょっとばかり難しいような簡単なような内容でした。

神社やお寺の境内で心地良い風に吹かれ、今回も大澤先生の良くわかるユーモア溢れる解説や、道すがら家々の庭先に咲誇る花を愛でつつ会員と楽しい会話をしながら道中を楽しみました。幹事さん方の安全への気配り等にも感謝いたします。次回も友の会行事を楽しみにしています。ありがとうございました。

磐手社神社拝殿前にて（撮影：近藤信子さん）

新装なった造幣博物館を訪ねて

上田　光次

去る6月19日（金）、造幣博物館と貨幣（硬貨）の実際の製造工程の一部を見学しました。当日約90名と多数の参加者がＪＲ大阪天満宮駅に集まりました。見学は予約制のため、なかなか見学の機会がありませんでしたので、今回興味深く参加させていただきました。

造幣博物館は構内に残る明治時代の西洋風建物(当時の発電所)を博物館に改装したもので、館内には造幣局創業当時をしのぶガス燈・大時計や大判・小判などの古銭をはじめ、明治以降のわが国の貨幣・外国から寄せられた貨幣のほか、勲章・金属工芸品など多数展示されています。

造幣局の歴史は明治4年（1871）創業、その当時としては画期的な西洋式設備によって貨幣の製造を開始したもので、明治初期における近代工業をわが国に紹介する役割を果たしており、先人の苦労がしのばれます。今まで貨幣の歴史などについてあまり知識がなかったので今回の見学会で楽しく学習できたことを喜んでおります。事前準備と当日の引率・案内をしていただいた幹事さんにお礼申しあげます。

造幣局の工場見学（撮影：今井捷子さん）

連載「浪花百景」～舎利寺（舎利尊勝寺）～

第10回

千倉　康由

用明天皇の頃、この里に住む生野長者と呼ばれる夫婦に言葉の不自由な子供が生まれました。その子が13歳の時、聖徳太子の耳にこの話が入り、早速その子を呼んで「予が前世に汝に舎利（釈迦の遺骨）を預けておいたが、今、それを返しなさい」と申された。するとその子は口より三粒の仏舎利を吐き出し太子に返しました。それよりその子は、素直に話せるようになりました。太子は二粒を四天王寺、法隆寺に納め、残り一粒は長者に渡されました。そして長者がこの仏舎利を奉ったところが舎利寺といわれています。当寺は1400年近い歴史を持つ由緒ある寺です。舎利寺は生野区の町名にもなっています。

編集後記

暑さ真っ盛りですが、みなさんいかがお過ごしでしょうか。暑い時には涼しい気なものを、というのが季節感ですが、祭りの熱気もまた夏の風物詩のひとつでしょう。歴博ではちょうど今、特別展「大阪の祭り―描かれた祭り・写された祭り―」を開催中です(8月31日まで)。天神祭りをはじめ、みなさんのお近くの祭りが絵画作品や写真で紹介されています。もちろん、祭りは夏だけのものではありません。秋の祭りシーズンに向け、事前に各地の情報を仕入れておくのも楽しいでしょう。この展示であなたも祭り通になれますよ!（大澤）

●大阪歴友 Vol.14（大阪歴史博物館　友の会だより No.16）●編集・発行　大阪歴史博物館友の会
平成21年7月31日発行　〒540-0008 大阪市中央区大手前4-1-32